

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	余 盼盼
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 遠藤周作文学の研究 ―宗教・ジェンダー・〈痕跡〉―			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	有元 伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	妹尾 好信	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田 啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	M-N. ボーヴィウ	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	ノートルダム清心女子大学 教授	山根 道公	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、戦後日本を代表する作家の一人である遠藤周作（1923-1996）の文学を、宗教、ジェンダー、〈痕跡〉という三つの鍵概念によって考察するものである。</p> <p>遠藤周作が描くキリスト教の神が日本的・母性的であることは研究の初期から指摘されており、さらに近年にはジェンダー批評を導入しての登場人物の分析が進展しつつある。だが、宗教とジェンダーの両者を複眼的・総合的に検討する視点はいまだ十分とは言えない。本論文は、(1) 遠藤文学の主要モチーフの一つである〈痕跡〉概念によって作品を再解釈し、(2) 同時代のキリスト教やジェンダーに関する言説に加えて1960年代後半にアメリカから世界各地に波及したフェミニスト神学の思想をも参照することによって、遠藤周作文学における宗教とジェンダーの交錯の様相を明瞭にしている。</p> <p>論文は、序章、3部10章からなる本論、結章により構成される。</p> <p>第Ⅰ部では、初期作品における宗教とジェンダーの交差点を探り、遠藤文学の原初的な基盤を明らかにした。遠藤の処女短編『フォンスの井戸』（1951）から最初の長編『青い小さな葡萄』（1956）への生成過程に注目して、「井戸」や「葡萄」のモチーフを具体的に検討し、それらが「神の痕跡」として解釈できることを示した。また、エッセイ集『聖書のなかの女性たち』（1959）におけるキリスト像を「共感共苦性」と「母性」の二面から考究して、後に登場するフェミニスト神学の思想と近似する方向に向かっていることを示した。</p> <p>第Ⅱ部では、中期作品を取り上げて、男性の視点によりそった語りの検討を行った。『わたしが・棄てた・女』（1963）では、男性主人公＝語り手の手記に描かれた〈痕跡〉を丁寧に分析して、〈痕跡〉の背後にある神の呼びかけへの応答を読み取る。『死海のほとり』（1973）については、戦時下の国家権力と宗教との衝突を背景とした男性ジェンダー化された家父長的な神を一方におき、遠藤がそうした神性を相対化して神の「力」の再考を促す作品として描いたことを評価するとともに、厳父／慈母といった二項対立をとっていることに遠藤の限界をも指摘した。</p> <p>第Ⅲ部では、後期の代表作『深い河』（1993）を取り上げて、主要登場人物の一人・美津子のジェンダー・パフォーマンスや、磯辺と磯辺の妻・啓子の関係に着目した。作中の〈痕跡〉やインドの女神・チャームンダーを精査することによって、ジェンダーや個々の宗教を超えて融合する普遍的な神のイメージを析出して、遠藤の宗教観の到達点として呈示した。</p>			

このように、本論文は、初期から後期にかけての遠藤の文学的営為の全体をたどり、遠藤文学にしばしば描かれる信仰やジェンダー・パフォーマンスに失敗する挫折者・劣等者たちが、〈痕跡〉を手がかりに魂の次元で他者や神との関係性を見出して救われていく様相を探っている。作中の〈痕跡〉のモチーフを解析し、外国語文献の参照によってフェミニスト神学の知見を援用しながら、遠藤文学において宗教とジェンダーの二つのコードの交差する様相を手厚く考察したところに特質がある。背景となる日本社会の内実についてのさらなる検討などの課題は残されているものの、〈母なる神〉を迫及する遠藤周作の創作姿勢の根幹を明らかにした意義はまことに大きく、遠藤文学のみならず、日本近現代文学における宗教とジェンダーの相関の研究を大きく進展させる貴重な成果として、高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)